

中国女性農民工の家族戦略
—時間的経過に伴う戦略の変化—

徐 琴*

Female Chinese Migrants' Family Strategies
—Changes of Strategies with the Time Progress—

XU Qin

Abstract

By using data from narrative interviews with 19 married female migrant workers from rural areas to work in urban areas, this paper explores how female migrant workers and their family members coped with problems caused by the absence of them and how family strategies changed during the time course of their migration.

The main findings can be summarized as follows: (1) all of them migrated mainly for their families' poverty, but the reality is changing during the time course of their migration. The specific gravity of the investment in education for their children had become increasingly high to all of them, (2) because of the critical role like housework and child-rearing they play in the family, after they are separated from the family for extended periods, the family has to adapt accordingly, (3) migration has brought on many financial benefits. These remittances mainly go into feeding and educating children who are still in education regardless of gender because in some cases they expect their children could have a good future through education, and they believe that these children will gratitude them and pay back to provide supports at their old age. The social status of their families could also be enhanced in this process.

Key words: China, female migrants' families, migration, family strategies, investment in education

1. 研究の背景と目的

中国は1978年以降、「改革開放」を始めとする一連の政策により市場経済体制へと移行し、急速な経済発展を遂げてきた。その一方で、都市と農村、沿海部と内陸部の地域格差は拡大し、農村政策の変化とも相まって農村では余剰労働力が生じている。これに伴って、地域間移動に対する規制も徐々に緩和され、農村から都市や豊かな沿海部農村への出稼ぎ者、すなわち「農民工」¹が急速に増加してきた。中国国家统计局の「農民工統計監測調査」によると、2011年12月31日時点で農村から都市に移動して就業しているものは1億5863万人で、その内の1億2584万人が家族と離れて暮らしているという。

農民工に関して、今日最も注目されているのは、いわゆる「留守番児童」²の教育問題である（劉 2008：96）。2006年に農民工の多い北京、上海、南京など10都市で女性農民工1000名に対して行われた質問紙調査では、全体の47.3%を占める既婚者のうち、60.6%は子どもを農村に置いて出稼ぎに来たという。彼女たちの最大の心配

キーワード：中国、女性農民工家族、出稼ぎ、家族戦略、教育投資

*平成23年度生 人間発達科学専攻

事は、「子どもの成績が下がる」、「しつけ不足で子どもがわがままになる」等であった(甄 2008:175)。母=妻役割を担う既婚女性の出稼ぎは家族に及ぼす影響が大きいにもかかわらず、近年では様々な要因により増加の一途をたどっている。彼女たちは出稼ぎにより、農作業、家事、子育てなどの担い手から賃労働者へと変わり、経済力を獲得する一方で、子どもの養育や教育などに悩むことも多い。彼女たちとその家族メンバーは、出稼ぎにより生じた問題をいかに認識して、いかに問題の解消と家族の生活改善に取り組もうとしているのだろうか。

このような問題意識のもと、本稿は、中国都市部で出稼ぎをしている女性農民工19人から得た語りデータを用い、彼女たちとその家族メンバーが、母=妻である対象者の出稼ぎに伴う家族生活上の変化にどのように対処し、時間的経過のなかで家族生活の維持と将来的発展のためにどのような戦略を採ってきたのかを明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究と本稿の視角

1) 出稼ぎを規定する要因

一般的に言えば、一国の人口状況は社会の生産力の水準または人口の扶養能力に釣り合ったものとなるべきだが、時に様々な原因でこうした均衡状況を達成することができなくなる。そのような経済状況の下で、人々は移動を通じて新しい相対的な平衡を達成しようとする(陸 2009)。中国農村人口の流動は初期の時代から貧困問題と深くかわり、1990年代の調査では、移動の第一の動機として「家族の貧困状態からの脱却」が挙げられた(譚 2009)。また、江蘇省南部の裕福な農村の出稼ぎ工場労働者に対して実施された調査では、送り出し地域の経済水準低下による就労先の不足や農村条件の悪さなどの要因が複合的に作用して家族の貧困をもたらし、出稼ぎに至ったことが確認された(熊谷 2002)。しかし近年では、以上のような経済的な要因だけでは出稼ぎの動機を説明しきれないという指摘がなされるようになり、非経済的要因について考察する研究者も増え始めた(楊・陳 2009)。

人口移動に影響を与える最も重要な社会的要因は家族であると陸(2009)は指摘する。家族の中で誰が、なぜ、どこに移動するのかが重要な関心事であり、様々な学問領域で論じられてきた。陸(2009)によると、移動者は一般に比較的高い素質、例えば高い教育レベル、良好な健康状態、豊かな向上心を持っており、移動先地域の諸条件に積極的に正面から向き合うことのできる人々である。経済学における収益-費用理論は、若年と高い教育レベルの人口の移動は比較的低いコストで、しかも潜在的な収益が高いことを強調する。ただし、本稿が対象とする既婚女性農民工は、陸が指摘するような高い資質を持つ人々とは言えないため、以上の指摘は妥当しない部分がある。本稿では、中国農村家族の出稼ぎによる変化を、急激な中国の社会経済的变化という外的条件の影響のみならず、女性農民工個人及びその家族の主体性、意識性、選択性を重視して捉えたい(石原・熊谷 2004)。

2) 本稿の視角

田淵(2012:39)によれば、家族戦略論とは、家族行動を「家族成員が何らかの規則・規範に受動的に従うことで生じるものとはとらえず、そうした行動が、構造的な諸条件のもとで家族の経済的・象徴的な利得を高めることを意識的あるいは無意識的に志向した能動的な実践」とみる視点である。この田淵の指摘に沿って言えば、女性農民工家族における母親の出稼ぎは、当面の家族生活に及ぶ否定的な影響を意識しながらも、それを埋め合わせて家族の経済的・象徴的利得を高めるための能動的実践だとみることもできる。ただし、「意図せざる目的」もあるため、「家族全体の利益のため」という明確な意図を持たない行為も含めて考えたい。また、従来の家族戦略論を用いた研究では、上層階級の家族に関する歴史社会学的研究が多く(Bourdieu 1972=2007; 森岡 2002)、家族戦略論における「家族の社会的地位の再生産」(田淵 2010)とは上層階級に限定されたものと理解されてきたが、本稿で対象とするような底辺層の農民工家族にも本理論が応用可能であるかを検討したい。さらに本稿では、女性農民工たちが、出稼ぎにより経済事情が改善してもなお出稼ぎを継続する目的にも注目し、家族戦略論のアイデアを踏まえてその変化過程について考察する。

3. 対象と方法

1) 調査の概要

a) 調査時期と調査対象者

調査は、中国では大きな農民工の流入地として知られる江蘇省の省都の南京市である。調査対象者として選定する条件は、「南京市に出稼ぎに来ている、少なくとも一人の扶養を必要とする子をもつ既婚女性」とした。19名の調査対象者のプロフィールは、表1に示した。現在、調査対象者が南京で就いている仕事は、全員、技術性を必要としない肉体労働である。最も多いのは「通いの家政婦」であり、19人中13人にのぼる。結婚前から出稼ぎ経験を持つ対象者はいる（A、D、E）が、本稿の分析では主に彼女たちの出産後の初めての出稼ぎ時点から見たい。また、19名中11名の対象者たちには子どもが2人以上おり、子どもが複数いる家庭では息子が1人以上いる。現在の子どもの年齢は、4歳から25歳にわたっており、すでに仕事に就いて離家した子どももいれば、就学中の子どももいる。未就学児は2名（A、D）だけである。

b) 調査方法

調査は、あらかじめ用意したインタビュー・ガイドを用い、個別面接による半構造化インタビューを実施した。インタビューの進め方の手順は以下の通りである。まず、調査対象者が規定の条件を充たした場合は、録音を依頼して、許可が得られた場合はインタビュー内容を録音した。インタビューに当たりインタビューガイドを参照したが、あくまでも導入的に用い、できる限り調査対象者に自由に語ってもらうよう配慮した。調査に要した時間は1時間から2時間ほどであった。

なお、インタビュー・ガイドには、対象者の基本属性のほかに、出稼ぎに至る経緯、農村家族との交流・関係維持、将来の展望など、本人と家族の全般にわたる項目を設けた。

2) 分析方法

データの分析の大まかな手順は以下の通りである。文字化したテキストの中から出稼ぎに出た動機やこれによって生じた問題への対処に関する部分を抽出し、出稼ぎ前、出稼ぎ後適応するまで、調査時の3時点に区分しながら調査対象者たちの語りを一人ずつ整理していく。その際、分析のポイントとなるフレーズや短い語句に踏まえながら、コーディングによってデータの縮約を行った。このコーディングに当たっては佐藤（2008）の方法に準じ、上記の3時点それぞれにつき、家族の経済生活の維持、子どもの日常的ケアやしつけ・教育などの要素に注目した。その一方で、繰り返してオリジナルの文脈に立ち返って、それを参照しながら行為や語りの意味を明らかにするよう努めた。

4. 語りの分析

1) 出稼ぎに至る経緯

中国では2001年以降、多くの農民の地域間移動への規制政策が廃止され、農民工を保護するための政策が発表されるようになった。これらの政策の実施状況は地域によって異なるが、農村出身者にとっては、非農就業を含めた就業選択をする条件が整ったといえる（山口 2008）。このような背景の下、本稿の対象者たちはほぼ2000年前後に出稼ぎをはじめた。彼女たちが出稼ぎを決意した理由もしくは動機は、子どもの生活や教育の費用のため（A、D、E、M以外）、農業の大変さや農業のみによる収入不足（A、D、I、J、P、Q、R）、郷鎮企業における収入の低さ、或いは郷鎮企業の少なさ（D、E、K、N、P、Q）、夫の給料の安さ（G、J、O、P、Q）等々のようにさまざまであるが、「当面経済的に厳しい、出稼ぎにより、より多くの現金収入を得たい」という共通の目標が見られる。

しかし、農村は都市より「男は外・女は内」という規範がまだまだ根強く残っており、母親である対象者たちが主に子育ての役割を果たしてきた。「農村では男性は家の中のことをやらないのは当たり前だよ。むしろやったら他人に笑われる」とFさんが語り、他にも同様の語りが多くみられた。したがって、女性が出稼ぎに行く場合、

徐 中国女性農民工の家族戦略

【表1】 調査対象者のプロフィール

対象者	本人の属性				子どもの属性				現在の家族			
	年齢	出身	学歴	出稼ぎ先 (年数)	職業 (月収)	初遠距離時の年齢	教育状況	郷里で留守番の家族 (年齢)	寄宿している子ども (年齢)	出稼ぎ中の別居親族 (年齢)	出稼ぎ先の同居親族 (年齢)	夫の職業 (収入)
Aさん	27	江蘇省盱眙	小学校2年中退	常州 (5年)、南京 (5年)	通いの家政婦 (約2000元)	長女 (5ヶ月)	幼稚園在学	舅 (57)、姑 (55)、長女 (6)	／	／	夫 (29)	自動車整備士 (1000元以上)
Bさん	33	安徽省阜陽	なし	南京 (10年)	通いの家政婦 (約3000元)	長女 (5)、長男 (1)	高校在学、小学校在学	姑 (80)、長男 (11)	長女 (15)	／	夫 (45)	ガードマン (約1000元)
Cさん	34	安徽省沛県	中学校中退	南京 (10年)	通いの家政婦 (約1500元)	長女 (2)	小学校在学	舅 (73)、姑 (68)、長女 (12)	／	夫 (37)	／	木工職人 (不詳)
Dさん	36	安徽省安慶	小学校5年中退	温州 (約8年)、南京 (6年)	通いの家政婦 (1000元以上)	長女 (2)	幼稚園在学	姑 (80)、長女 (4)	／	／	夫 (37)	日雇い土木作業員 (約2000元)
Eさん	36	安徽省滁県	中学校	深圳 (約9年)、南京 (1年未満)	電子工場工具 (約1800元)	長男 (4)	小学校在学	舅 (73)、姑 (72)、長男 (9)	／	夫 (38)	／	電機工場労働者 (2000元以上)
Fさん	38	安徽省蚌埠	中学校	南京 (6年)	通いの家政婦 (約2000元)	長女 (10)、長男 (4)	中学校在学、小学校在学	舅 (60)、姑 (60)、長女 (16)、長男 (10)	／	夫 (39) 上海	／	建築現場の保管係 (1000元以上)
Gさん	39	安徽省定遠	中学校中退	南京 (9年)	通いの家政婦 (約2000元)	長男 (9)	高校在学	舅 (70)、姑 (70)	長男 (18)	夫 (41)	／	物流会社従業員 (約2000元)
Hさん	40	安徽省馬鞍山	なし	南京 (約8年)	会社の清掃局員 (1200元)	長女 (12)、次女 (10)、長男 (9)	大学在学、大学在学、高校在学	母 (70歳以上)	長女 (20)、次女 (18)、長男 (17)	夫 (45)	／	建築現場肉体労働者 (7、80元/日)
Iさん	40	安徽省巢湖	小学校中退	南京 (3年)	会社の清掃局員 (1200元)	長男 (17)、長女 (11)、次男 (9)	中学校中退、中学校在学、小学校在学	姑 (80歳以上)、夫 (45)、長女 (14)、次男 (12)	／	長男 (20)	／	農業 (約3000元/年)
Jさん	41	江蘇省淮安	中学校	南京 (10年)	高職マニション従業員 (1000元) 家政婦兼業 (約400元)	長男 (9)	大学在学	舅 (64)、姑 (65)	長男 (19)	／	夫 (42)	内装事業業主 (3000元以上)
Kさん	42	安徽省天長	なし	南京 (6年)	街道の清掃局員 (1500元)	長女 (14)、次女 (9)、長男 (7)	中学校中退、中学校在学、小学校在学	姑 (83)、長女 (20)★、次女 (15)、長男 (13)	／	／	夫 (不詳)	大工 (約2000元)
Lさん	42	安徽省肥東	なし	合肥 (3年)、南京 (10年)	通いの家政婦 (約2000元)	長女 (9)、長男 (3)	高校卒業、中学校在学	舅 (65)、姑 (65)、夫 (45)	長男 (16)	長女 (20) ※	／	建築現場肉体労働者 (不詳)
Mさん	42	江蘇省宿遷	なし	南京 (7年)	通いの家政婦 (約3000元)	長女 (13)、長男 (11)	中学校卒業、高校在学	夫 (44)	長男 (18)	／	長女 (20)	個人運輸 (不詳)
Nさん	43	安徽省沛県	高校	南京 (7年)	通いの家政婦 (約2000元)	長女 (13)	大学在学	舅 (不詳)、姑 (不詳)	長女 (20)	／	／	死別
Oさん	44	安徽省滁県	中学校卒業	南京 (約10年)	通いの家政婦 (約3000元)	長女 (10)	大学在学	／	長女 (20)	／	夫 (47)	調理師 (2000元以上)
Pさん	46	江蘇省沭陽	小学校	無錫 (1年)、江陰 (4年)、南京 (5、6年)	通いの家政婦 (約3000元)	長女 (12)、次女 (11)、長男 (9)	高校卒業、高校卒業、高校在学	舅 (65)、姑 (65)	長男 (19)	／	夫 (44)、長女 (22)、次女 (21)	ガードマン (不詳)
Qさん	48	安徽省丹鳳	中学校	南京 (約8年)	通いの家政婦 (約2000元)	長女 (11)、次女 (7)、長男 (7)	高校在学、中学校在学	舅 (70)、姑 (68)、長男 (15)、次男 (15)	長女 (19)	／	夫 (48)	団地の清掃局員 (800)
Rさん	48	安徽省太和	なし	南京 (8年)	通いの家政婦 (2000元)	長女 (13)、次女 (11)、長男 (9)	小学校中退、小学校在学	夫 (51)	長男 (17)	長女 (21)、次女 (19)	／	農業 (不詳)
Sさん	49	安徽省淮北	中学校中退	南京 (4、5年)	街道の清掃局員 (1200元)	長男 (20)、次男 (15)、長女 (13)	中学校卒業、大学在学	舅 (78)	次男 (20)、長女 (18)	長男 (25)	夫 (47)	書店勤務 (1000元以上)、新聞配達 (不詳)

註1) 表で提示されている情報はすべて2010年のデータである。

註2) ※既婚 ★郷里で働く

註3) Aさん、Dさん、Eさんは結婚前から出稼ぎにいた。AさんとDさんは結婚した後に、夫について南京に出稼ぎに来た。Eさんは結婚・出産後、また何年か元の出稼ぎ先に戻ったため、南京に来てからまだ1年未満である。

註4) 1元=約13円

註5) 「寄宿している子ども」は学生寮に寄宿しているのが全員である。中国農村部では高校に入った後に学校が家から離れている場合が多くて寄宿を遣ってしまう人が多い。

男性は往々にして「食事を誰がつくる」(I、L、M、O、Rの夫)、「洋服を誰が洗う」(C、F、I、M、O、Rの夫)、「子どもの世話なんてできない」(F、I、L、M、Rの夫)等々のことで不安になり、反対することもある。このため、夫が家に残り妻が単身で出稼ぎに行くという提案に対し、往々にして夫は強い抵抗を示した。出稼ぎに出た時点で、7人(C、F、I、L、M、O、R)の夫が実家にとどまっていた。Iさんの場合、本人が出稼ぎの意向を夫に話した際に、子どもと老親の世話、炊事などはどうするかで喧嘩になり、次のように夫を説得した。

「お母さんは体が弱いので世話が必要だよ。でも、お母さんとあたしの性格が合わないことは、あなたも知っているでしょ。あとね、農作業はとても力が必要な場合が多いから、あたしだけでうまくできないわ。あなたは別に何か特別な技術を持っていないし、出ても仕事がうまく見つかるかどうか分からないよ。見つかったらあなたはね、タバコを吸ったりお酒を飲んだりしたら結構な支出だよ。子どもたちはこれからお金かかるのにな。」(I)

Iさんの夫はこのような家庭事情を考え、結局やむをえず本人の出稼ぎを認めたという。Iさんのように、出稼ぎ後家政婦として就労している対象者が多い。妻が出るということは、夫が出る場合よりも、子育てや家事に支障をきたすリスクが大きいだろうが、それが想像できたにもかかわらず妻が出稼ぎに出たという背景には、都市部で家政婦の需要が大きく、夫よりも確実に仕事を見つけることができ、場合によったらより多くのお金を稼ぐ可能性があるからという社会構造的条件との関連で決定されたと思われる。

一方、その他11名の夫と一緒に出稼ぎに出た、或いは夫が先に出稼ぎに出ている事例では、夫からの反対が少なかった。その理由をAさんは、「子どもを預けられるところがあったから」と語った。また、Hさんは、「妻としての私も稼ぎ手になったら、自分の経済負担が軽くなると夫が考えたから」と述べた。同様のことを2人以上の子どもの教育費や生活費などを負担しているJさん、Kさん、PさんやSさんも語っている。

彼女たちの出稼ぎについて、本人と夫の両親は積極的には賛成しなかったものの、明らかな反対は少なかったという。それは、家族全体の当面の生活維持と経済水準の向上を優先的に考慮したためである。出稼ぎに行く前、健在で健康状態の良い両親から子育てや家事について協力を得る話も合意に達したという。

2) 出稼ぎ直後の混乱と対処

a) 家事や子どもの日常的ケア

対象者たちにとって当面の問題は、「家事は混乱状態に」(R)、「バランスのいい食事ができなくなった」(I)などであった。夫が郷里に残っていても、家事や子育てには不慣れであり役には立たなかった(C、F、L、R)。そのため、本人及び夫の両親からの子育て支援や家事の協力は出稼ぎ後に多くなるという傾向は、健康状態の良い老親のケースに見られた(ただし、I、M、N、O、Sを除く)。出稼ぎを機に、それまで別居していた親と同居するようになる事例もあった(E、J、L、N、P)。

結局、大半の事例において子育ての中心的担い手は老親であったが、Iさん、Mさん、Oさん、Sさんの場合、老親は死去したか、或いは健康状態がよくなかったため、親には頼れなかった。このために夫に子どもの世話を頼んだが、不慣れな夫は上手にはできなかったと全員が語っている。子どもの複数いる家族では、子ども同士で互いに助け合わせるか、上の子に下の子の世話を頼む(B、I、M、S)という対応も見られた。老親に世話を頼み、併せて子ども同士の助け合いを求めた事例もある(P、Q、R)。他には、Hさんのように、本人ができるだけ帰郷するようにしたという語りも見られた。

しかし、それでもなお彼女たちの大半は、こうした子育ての代替が十分になされているか、また子どもが母親として自分を認知し続けてくれるかという心配を抱いていた。この不安を軽減するため、多くの対象者たちは、日常的に生活を共にできないことを子どもにお金や物を与えることで埋め合わせようとしていた。初めての出稼ぎ時に子どもが1歳だったBさんは次のように語っている。

「電話がなくあまり連絡できなかったけど、帰郷時に必ず息子の好きな食べ物、新しい服を買って帰り、子どもの機嫌をとるようにしたんだ。」(B)

他の対象者たちも、出稼ぎに出た当時の子どもの年齢はさまざまだったが、最初の何年間は連絡手段が整っておらず、仕事も不安定であったこともあり、精神面より、子どもたちの歓心を物質面で充たすことで満足させる

よう努めていた。ただし、子どもたちに直接お金を渡すという事例は少ない。出稼ぎ当初は多くの対象者の子どもが幼く、お金を管理する能力がいまだ備わっていないと判断して、お金は夫か親に預ける人が多かった。

b) 子どもの教育における優先順位

前述の動機で挙げたように、「子どもの生活費や教育費のため」という点が多く語られた。しかし、それは家族の基本的な経済事情の改善が前提となっていた。家族全員の衣食が満ち足りたうえで、子どものしつけや教育が考慮され始めた。対象者たちが出稼ぎに行っても、すぐには家庭の経済事情が改善できたわけではない。このため複数の子どものいる場合、年長の子どもは息子でも娘でも完全な教育が受けられない事例が見られた。中には、年長の息子、或いは教育において重視されなかった娘が学校を中退させざるをえなかった事例もある（I、K、M、R）。それでもなお、同じ時期に教育を受けている子どもが複数いる家族（F、H、I、K、M、P、Q、R、S）では、娘より息子により多くの教育投資をする傾向も見られた。一般に農村地域では、農業生産における男性労働力の必要性、「養児防老」（娘はいずれ結婚して他家に入り、将来一緒に暮らさない可能性があるため）などの伝統文化の影響、男尊女卑の伝統的慣行などにより、娘より息子を尊重する。

対照的に1人っ子の場合は、性別にこだわらず、彼女たちは子どもの教育のためにお金を借しまずかけようとしていた（A、C、D、E、G、J、N、O）。

3) 将来への展望

a) 家事や子どもの日常的ケア

対象者たちの出稼ぎ年数は3～13年で、調査時点における最年少子は4～20歳となっていた。子どもたちは成長につれてしだいに自立できるようになる。さらに、介護が必要になってきた老親の世話役を子どもに頼む場合もある。Bさんの場合、10年間の出稼ぎ中に、息子は1歳の赤ん坊から11歳の小学生に成長していた。

「私の母は今日の具合があまりよくない。母が病院に行くのはもったいないと思っているようでお金を出してあげると言ってもなかなか行ってくれない。父はご飯を炊くことさえできない人で、家事や子どもの世話を期待できない。だから、私は大きくなってきた息子に『ばあちゃんも大変だからあまり迷惑かけないでよ。学校が終わったらさっさと帰って宿題を終え、ばあちゃんの家事を手伝ってよ』と時々言い聞かせる。」(B)

他にも、老親の健康状態を伝えることや家事などを手伝うことを子どもに頼む事例が多く見られた（C、F、H、I、K、Q、S）。

学校に寄宿している子どもに対しては、学歴の低い対象者が多いことから勉強内容に踏み込まず、「学校の食事、ちゃんと取っている？」（G）、「洗濯はきちんとできている？」（J）、「勉強は頑張っている？」（R）など、生活面や勉強面の状況確認に留まる場合が多い。Jさんは息子が大学で何を専攻しているか分からないため、息子に「あなたの勉強についてはあまり分からないから聞きようがない。とにかく自分のことは自分でやってね。寒かったら服を重ねる、ちゃんと栄養のあるご飯を食べること」を要求したと言う。他にも子どもに対して同様に求めている対象者がいる（G、H、L、M、N、P、R、S）。

b) 子どもの教育を通じた将来への投資

老親に子どもの日常的ケアを頼んでいる対象者たちは、「親は子どもを溺愛する」（A、D、E、F、Q）、「子どもがわがままになる」（A、C、F、K、Q）、「親は字が読めないの、子どもの教育なんか期待できない」（B、C、F、K）といった心配を抱いている。一般に農家の嫁は発言力が弱いといわれているが、彼女たちは都市生活での見聞を通して子どもを溺愛することの悪影響などについて学び、夫や老親に説得的に言い聞かせることができるようになる。両親や夫もたいていの場合彼女たちの意見を受け入れ、対象者たちと老親や夫の間の意見がしだいに一致する傾向も見られた。

「『子どもをあまりに甘えさせちゃだめになるよ』と私は時々都市での伝聞を姑に話している。そうならないように、うちの子に対してどうすればいいか色々意見を交わす。姑は信用してくれて、ほとんどの場合、聞き入れてくれるのよ。」(E)

対象者たち自身も、こうした家族の中の発言権の強化に加えて、都会人の子育て法やライフスタイルについて学び、視野が広がって文化程度が向上したことを高く評価していた。

「都会人は子どもが悪いことをしてもすぐに叩くのではなく、道理を聞かせる。(略) いくら叩いても子どもに

その理由が分かっただけなら、いい教育じゃない。」(L)

Lさんの息子も母親の変化を感じ取って、Lさんが家政婦として働いている都市家族の事情や都市の様子について時々聞いているという。本調査の対象者は家政婦として都市家族内で働いている人が多く、他の職種よりも都市生活者の考え方に触れる機会が多い。Lさんのみならず他の対象者たちも、都市家族の子女教育における長所を取り入れ(B、C、E、F、G、I、N、P、Q、R)、子どもの都市生活への憧れを喚起させていた。例えばRさんは、「時々息子に都市の良さを伝える。『都市の大学に受かって、卒業した後苦勞しない職に就いたら都市に残れるよ』と言ひ聞かせるわ」と語った。

ただし、全体的に学歴が低い対象者たちは、成長した子どもの学校教育や将来の進路などに対する知識が不十分で、そのような場合に教育水準が相対的に高い夫に子どもの進学や卒業後の進路の相談などを任せたり(G、H、J、K、P、S)、学校の教師を通じて子どもの勉強や学校での様子について確認する場合も見られた(B、C、F、G、L、M、N、O、P、R)。

「息子の勉強、奨学金、就職などについては夫が分かるので、夫が聞けば十分だわ。私は食事、服、健康などの生活面の注意点を聞かせればいいわ。」(J)

「勉強のこととか、子どもの精神状態などは、やはり先生たちがプロだから、先生に直接に聞いたほうが安心だわ。」(O)

また、対象者たちが出稼ぎを始めた当時は、当面の生活費を得ることも含めて出稼ぎの動機は多様であったが、現在は一部を除いて年少の子どももある程度成長し、経済面も落ち着きを見せたため、全員が学校教育を受けている子どもへの教育投資を目的として出稼ぎを続けている。対象者たちの子どもへの経済支援の必要度は、その年齢段階により異なる。本人の稼ぎの何割を子どもの養育や教育に充てているかの数字化は難しいが、稼ぎの大部分は子どものためのものとみなしていた。3人の子どもが調査時点で全員学校に通っていたHさんは、「南京での生活費を最低限に抑えて、残りは全部子どもの学費や生活費にしている」と述べ、子どもがまだ幼いAさんは、「子どもがこれからお金が必要になりそうなので稼ぎの大部分を貯金している」と語った。中国では近年の急速な経済発展を背景に高学歴化が進み、その波は農村にも及んでいる。都市社会の学歴主義に影響された彼女たちは、子どもの進学による生活費・学費などの支出増に伴って、給料のよりよいところに仕事を変える場合もある。かつて健康状態の問題や怠惰ゆえに出稼ぎに行かなかった夫たちも、今では出稼ぎと帰郷の状態を繰り返す(C、F、L、M、O)、妻の経済的負担を軽減しようとしている。子どもに学校生活を継続させ、可能であればより高等な教育を受けさせることは家族全員の希望でもある。

「娘は中途半端で教育が終わったから、息子にはそうさせたくない。今の世の中、いい大学の卒業証明書はいい会社への通行証だと思うわ。(略)夫は家の新築のことで落ち着いた後、一緒に出稼ぎに来ている。私、娘と夫3人は、全員息子の大学の学費・生活費のために頑張るつもり。」(M)

ただし、彼女たちが出稼ぎを続けるのは、「子どものため」という理由にとどまるものではない。子どもが高い学歴を身につけ、社会的地位や収入の高い職業に就くことができれば、将来にわたる家族生活の安定や自身の老後の扶養も期待することができる。Eさんの子どもはまだ小学生であるが、「息子が立派になったら、家族にとってもほこりだ」と語った。Jさんは息子が名門大学に受かった頃の様子について「私たち一家のメンツが立った」と語った。このように、子どもたちは小学生から大学生にわたって年齢は様々であるが、「高い学歴=子どもの出世=家族の名誉」という似通った考えを示した対象者が多い。さらに、子どもへの老後の扶養への期待としては、Eさんは「まだずっと先のことで何とも言えないが、1人息子だから彼に頼るしかないでしょう」と語った。他の対象者も、「良い教育を受けさせるために現在出稼ぎの苦勞を我慢できる」(N)という自分の気持ちが子どもに分かっていると信じている。夫の怠惰で家族を支える稼ぎ手とならざるをえなかったRさんは、次のように語っている。

「私は今全力で息子のことを支えればいい。稼いだお金は全部息子のために使おうと思っている。現在子ども(息子)に色々よくしてあげたら、私たちが年を取って働けなくなり、介護が必要になっても、子どもは当然面倒見てくれると思うよ。」(R)

ただ、調査時点で1人娘がまだ未就学児であるAさんやDさんは「子どもに良い教育を受けさせたい」と語ったが、本人たちはまだ若く将来にわたる家族生活や自身の老後について具体的に描けなかった。

5. 考察

本稿では、中国都市部で出稼ぎをしている女性農民工とその家族が、母=妻である自身の不在に伴う家族生活上の変化にどのように対処し、何を目標に出稼ぎを続けてきたのかを、家族戦略論の考え方を基礎において分析してきた。本節では、女性農民工たちの語りの分析より見出された知見を2点にまとめ、総合的に考察する。

第1に、母=妻である女性農民工の出稼ぎの契機や継続理由の根底には、一貫して家族の経済事情があるものの、出稼ぎが続く中でその内実が変化していることが確認された。彼女たちは多くの場合、逼迫した家計を補うための一時しのぎの手段として出稼ぎを選択した。その後、長期にわたる自身と場合によっては夫の出稼ぎにより、家計状態はある程度改善されていく。それでもなお出稼ぎを継続する理由は、子どもの成長に伴う必要経費、とりわけ教育費の増大に対応するためであった。そこには、子どもへの教育投資を通じ、子ども本人及び家族全体の運命を変えるという強い意向が見て取れる。本稿では、農民工の出稼ぎ動機は当面の経済状況改善のための生存戦略（黄 1997）という知見を裏付けるとともに、時間的経過に伴う彼女らの出稼ぎの目標設定の変化をも明らかにした。また、家族戦略論は従来、上層階級の家族の階層的地位を維持するものと理解されてきた（Bourdieu 1972=2007；森岡 2002；田淵 2010）が、本稿では、中国社会の底辺層に置かれる農民工家族が当面の生活維持や家族の階層的地位の維持にとどまらず、将来における上昇移動を意識的・無意識的に志向する戦略を採用し、出稼ぎによる経済的利益を子どもへの教育投資を通じて次世代までもたらしめていくことが確認できた。子どもに高い学歴を身につけさせることは、子ども自身のためであると共に、子どもの教育と職業上の成功を通じて家族の根本的な階層移動を図る戦略的な行為だと言える。ただし、女性農民工家族における出稼ぎが家計の安定に寄与するには一定の時間を要するため、複数の子どもがいる場合の教育投資は、必ずしも男子優先や長子優先の伝統的規範に従うものではなかった。むしろ、出生順位の低い子どものほうが性別にかかわらずより多くの教育投資を受ける傾向も一部では見られ、状況適応的な戦略が採られていることも確認された。

第2に、1点目として指摘した農民工家族の上昇移動に貢献している妻=母である女性の家族的地位、地域社会のなかの地位の変化について考察したい。一般に中国農村では、今日でもなお男尊女卑や家父長制規範が根強く残っており、男子に比べて女子への家庭による教育投資が乏しく、結果的に労働市場において、農村出身の女性は男性に比べて賃金などの面で低い評価がなされてきた（金, 2010）。しかし本稿の対象者たちは、全員配偶者より教育レベルが低いにもかかわらず、夫のほうが留守宅にいるか、あるいは夫と別の場所で出稼ぎしているなどの事例が約半数を占めた。また、彼女たちの半数以上は夫より多く稼ぎ、夫よりも浪費的な消費行動はとらないため、日常生活において節約できる。そのため、彼女たちの稼ぎ手としての価値が上がり、出稼ぎ者として選ばれる可能性が大きくなったのである。ただし、当面、彼女たちの不在から生じる家事・子育ての支障は大きかった。この問題に対し、女性農民工及びその家族は、郷里に残る夫や夫婦双方の老親、そして場合によっては年上のきょうだいや子どもの担任である教師まで動員して、この困難を何とか克服しようとしていた。この家族内の役割調整は最初からうまくいったわけではないが、夫や老親たちとぶつかりあい、離反しながらも、次第に子どもと家族の将来のためという共同目標のもとに協力体制が確立されていく。女性農民工が都市生活で得た経験や知識が家族内における彼女の発言権を増したことも、この協力体制の確立に寄与している。第2の知見は、女性農民工個人のエンパワーメントというルートを通じて、家族全体の現在と将来の生活改善がなされるという家族戦略の様相を示している。

本稿の調査では各事例について情報量が多く、多様性のほうが目立ったが、比較的多くの事例に共通する農民工家族の家族戦略とみなせる行為を析出するように努めた。ただし、子どもの年齢や出稼ぎ期間など、各事例の属性による差異については、分析にあたり十分配慮できなかった。また、一時点の、少数事例による調査だけで明確な結論を導くことは難しい。今後も長期的に農村家族と農村女性の生き方の変化を中国社会の変動との関連で追いつけていきたい。

【註】

1. 中国国家统计局による定義では、出身地から離れずに、年間6か月以上非農業関係の手段に頼って家計を立てる農民たちのことを「本地農民工」、出身地を出て年間6ヶ月以上主に出稼ぎ肉体労働者となる農民たちを「外出農民工」と区別している。「外出農民工」には農業における余剰労働者のみによる移動、や家族全員による移動という二パターンがある。本稿では「外出農民工」の前者のパターンを指す。
2. 主に両親とも、或いは片方は都市に出稼ぎに行っているが、農村に残された子どもを指す。子どもたちは両親の片方か、老親と一緒に暮らす場合が多い。

【参考文献一覧】

- Bourdieu, P. (1972) *Les stratégies matrimoniales dans le système de reproduction*, Annales, 4-5, juillet-octobre: 1105-1127. (丸山茂・小島宏・須田文明訳、2007「再生産戦略システムにおける結婚戦略」『結婚戦略』藤原書店：pp199-244.)
- 石原邦雄・熊谷苑子(2004)「現代中国家族への視点」石原邦雄編『現代中国家族の変容と適応戦略』ナカニシヤ出版：pp3-28.
- 金一虹(2010)「中国における労働力移動からみた農村のジェンダー構造」東海ジェンダー研究所記念論集編集委員会編『越境するジェンダー研究』明石書店：pp136-156.
- 黄平編(1997)『尋求生存：当代中国農村外出人口の社会学』雲南人民出版社
- 熊谷苑子(2002)「送り出し地域・送り出し家族と出稼ぎ女性」熊谷苑子・榎渥俊子・松戸庸子・田嶋淳子編『離土離郷—中国沿海部農村の出稼ぎ女性』南窓社：pp80-100.
- 森岡清美(2002)「華族社会の『家』戦略」吉川弘文館
- 陸小媛(2009)『現代中国の人口移動とジェンダー—農村出稼ぎ女性に関する実証研究—』日本僑報社
- 劉綺莉(2008)「農民工の子どもの教育問題に関する研究」『人間社会環境研究』第15号、金沢大学：pp95-106.
- 佐藤郁哉(2008)『質的データ分析法 原理・方法・実践』新曜社
- 田淵六郎(1999)「『家族戦略』研究の可能性—概念上の問題を中心に—」『東京都立大学 人文学報』第300号(社会福祉学 15)：pp87-117.
- (2010)「家族戦略」社会学事典刊行委員会編『社会学事典』丸善：pp256-257.
- (2012)「少子高齢化の中の家族と世代間関係—家族戦略論の視点から—」『家族社会学研究』第24巻第1号：pp37-49.
- 譚深(2009)「人口流動対農村貧困と不平等の影響」『開放時代』第10期：pp81-95.
- 甄硯(2008)『中国農村婦女状況調査』社会科学文献出版社
- 張玉林(首藤明和訳)(2008)「離村時代の中国農村家族」首藤明和・落合恵美子・小林一穂編『分岐する現代中国家族 個人と家族の再編成』明石書店：pp302-335.
- 山口真美(2008)「農村労働力の地域間移動をめぐる政策の変遷」池上彰英・實欽久俊編『中国農村改革と農業産業化政策による農業生産構造の変容』調査研究報告書 アジア経済研究所：pp39-76.
- 楊竹・陳鵬(2009)「転型期農民工外出就業動機及代際差異—来自珠三角、長三角及中西部地区農民工の実証調査分析」『農村経済』第9期：pp15-19.
- 楊善華・沈崇麟(2000)『城郷家庭—市場經濟与非農化背景下的變遷』浙江人民出版社